

西岡虎之助「日本経済史」講義草稿(上)

——一九四五年一〇月東京帝国大学経済学部——

海 津 一 朗

要 旨

第二次大戦中に時局に抗して学問的な良心を貫いたことで稀有な存在とされる西岡虎之助の敗戦直後の講義ノート(東大経済学部の日本経済史)を公開する。本来公開を目的としない手記であり、研究者・教育者としての西岡の真の姿を示す史料となり、敗戦後歴史学の等身大の実像、ひいては良心的な知識人の思考を知る手掛かりとなる。ここで紹介する前半の中からは、国体護持・天皇擁護(至尊免責)、米国占領政策批判、赤色デモクラシー(共産主義)傾斜という、西岡の不安定な確信が明らかになる。国家の行く末をスウェーデンに求める点もオリジナルな政治評論として注目されるであろう。なお、公開については所蔵者の了解を得ている。

本稿は、日本学術振興会助成金(基盤研究C課題番号21K00870)の成果である。

解題

本稿は西岡虎之助史料(和歌山大学紀州経済史文化史研究所寄託)のうち「第一 開講の辞(現下の我国情)」のタイトルをもつ全四十四丁からなる講義台本の翻刻である。紙背文書と内容から推して一九四五年十月開講の東京帝国大学経済学部での「日本経済史」講義と推定される。戦時中の時局に抗した「反骨の歴史家」西岡が敗戦直後、若い学徒に何を語るのか。史学史のみならず知識人論として注目されるであろう。自らの講義のためのメモ書きであり(次頁の写真参照)、反古紙の裏表に細字の万年筆で書き付けており、全紙に渡り貼紙付箋・抹消挿入・資料添付がある。本来活字になることが想定されていないノートである。全体の分量を考えて上下二部に分けて全文を公開したい(下巻は、『紀州経済史文化史研究所紀要』43、2022に翻刻した)。なお翻刻・解題作成に際して和歌山大学日本史ゼミ生の西野寿紀氏の調査協力を得た。

凡例

先行翻刻した國學院大學(横書き)、大正大學(縦書き)の講義ノートに拠って、判読不能文字を●、抹消文字を■、見せケチのうち西岡の主義主張に関わるもの「×抹消文」と示し、挿入・訂正や貼紙類は全て「」で示し注記した(一丁半面抹消の類は■「」を省略した)。これと区別するため本文中の「」は全て『』で翻刻した。剝離状態の貼紙類は可能な限り原位置に翻刻したが不十分である。冒頭の「○数字」は丁数の始まりを示す。

なお、本文中には問題ある差別表現等が散見するが、敗戦後知識人の知的体系を知る史料として一切手を加えずに翻刻した。

史料原状写真

A 冒頭部「第一 開講の辞(現下の我国情)」および全体



B ①丁 本紙・貼紙・付箋(西岡文書研究で俗に「フンドシ」と呼ばれる)



【①】第一 開講の辞(現下の我国情)

戦争は終わった。それは敗戦といふ形において終わった。小供までが勝つ日までとて、あらゆる実生活上の苦しみを堪へ忍んできたわれら国民にとって、これほど悲しいこと柄はない。しかし敗戦は厳然たる現実の事実である。回避することが不可能である。不可避である限り、正当これを認識して、敗戦によって展開する新事態に対して、われわれ国民は堂々と対処せなければならぬ。

しかしながらこの新事態は、われわれ国民のうちに内燃せる主観的意力によつて戦ひ取つたといふよりも、「×敗戦といふ」客観的契機が、いきなり枠をとりはづしたのに基づくと見るべ【②】きである限り、われわれ国民は日本国がこののちどんな形で存続して行くのが不可解であり、ひいては日本人としてこれから如何に生きべきかについて迷はざるを得ない。迷はざるをえないけれども、しかし乍らその日暮しの生き方放縦無定見な生き方は日本人として断じて許さるべきではない、それならば日本国は今後どんな方向を辿つて存続し、従つて日本人はどんな生き方をするのであらうか。

大東亜戦にみる日本の敗戦は、広くいへば国際聯合國側の戦力によるのであるが、直接的に米国のそれによるものである。而してこの大東亜戦は、世界的な観点からは、第二次世界大戦の一主軸をなすものであるが、他の一主軸としての欧州戦において、ナチスドイツに対して直接に最後のトドメを刺したのは、ソ連国である。従つてこの第二次世界大戦の終了後において、国際的最も有力な発言力をもつもの、とくに敗戦国の処致に対しても、有力な発言権力もつのは米とソ連とであることは自明であらう。敗戦国日本も、また、この二国のもつ実戦に非ざる助力としての政治力の制握下に置かれるわけで【③】ある。米国は民主主義Democracyの国であり、ソ連は社会主義socialism乃至共産主義communismの国である。これらは或は別に前者を白色デモクラシー、後者

を赤色デモクラシイ、といはれる程に近似の理論をもつてゐる。その區別付けられる最大重要な点は、私有財産を認めるか認めないかにある。

かやうに似てゐるか根本的に異つた二つの政治力、が、今やわが独立を制握し、日本の将来を律しやうとしてゐる。この場合に現前に表面的に制握しつゝあるのは「×白色デモクラシイ即ち」日本に直接とどめを刺した米国による民主主義即ち白色デモクラシイであるが、今後は重点的に制握力を増大するのがソ連的な赤色デモクラシイ、即ち社会主義乃至共産主義であつて、今後における国民の生活の餓死的窮乏化並に最低四五百万最高一千万といはれる失業者群の発生等は充分にその増大を必至ならしむる温床をなすからである。この二主義は相似て而非なるものであり、今後においてこの二主義はきつと相克するであらう。その場合に本質的にもまた相対的にも、民主主義は保守的であり、社会主義共産主義は進歩的主張となり相克(争)は保守進歩両主義の形態をとる。

〔④〕この相克はわが国においては明治維新以来並立的なものであつたが、それは一応は民主主義の勝利の形をとつた。元來民主主義は国民たる個人に最高権力あるものとする政治思想である。所でそうした個人の権力は個人が外部的意思から独立してゐて拘束を受けないといふことを前提として成立する。この個人の完全な独立、個人に於ける無拘束は、すなはち個人が自由状態に置かれることであつて、自由主義という社会思想これである。かやうにして、民主主義といふ政治思想は、自由主義といふ社会思想を根柢に置いてゐることから解せらるるであらう。

而してこの民主主義は、わが国においては明治維新以降、議会議主義・議會議治・「或程度の地方自治主義」といふ形において一応結実したわけで、これ以上には発展しなかつた。(「×却つて」大正期の吉野作造等によって米流の民主主義が唱導せらる、これについて近似の政治思想としての社会主義・共産主義が活発となる―昭和期以後―後強化せらる。)かくの如く民主主義等の政治思想は

榮えなかつた。然るに民主主義の根柢をなす自由主義に至つては、政治的領域以外、餘に広く繁榮・流行し自由主義的風潮を奮つた。そののち〔⑤〕でも、とくに經濟方面において最も顕著な相を呈した。私有財産制度のもとに、個人の営利のために、自由と自由競争とが許される經濟としての自由主義經濟これであるが、この經濟は公益よりも私益を主とするところからして別に個人主義的經濟ともいはれ、さらにそれは資本主義的行動に最も都合がよいところから資本主義經濟ともいはれる。資本主義經濟は、私有財産制と営利における自由競争とを基本的成立要件とする組織である。かくして自由主義は、資本主義的經濟といふ形において最も發展をとげ、經濟的人間のあらゆる經濟的活動の基礎をなす關係からここに資本主義社會が出現することとなつた。

(頭注メモ)「資本とは剰餘価値を生産価値これを最も大事とした經濟態制」

資本主義經濟の顕著な發展は、明治三〇年代からで、それより大正年代にはいつて躍進的に高度化してゆき、漸次に独占的資本主義經濟段階にはいつた。即ちトラスト(企業合同)・カルテル(組合)なる、さらにコンツェルン(大合同)の手段を巡らして成立したのでこれは大財閥出現の成立〔⑥〕過程であつて財閥の恣意的な独占形態がここに展開する。而もそれは国内的な經濟に対する經濟的独占現象たるに止まらず、國際的には經濟的な帝國主義にまで發展した。帝國主義は、資本主義の最後の段階(最も發展した段階)といはれ資本の輸出の盛んとなり、その結果國際的トラストによって、最大の資本主義國家の間に世界の經濟市場の分割が行はれ、ひいてはその市場の政治的支配にも及ぼんとするものである。恣意的な独占性は益々強化せられて發展せられ「。大正五年預物●●へ●いく」対支政策などはその顕著な現はれといへやう。

而してこうした帝國主義的色彩を帯びることは我が資本主義が世界的最高水準に達したことを意味する。世界の最大資本主義國と肩を並べるに至つたことを示すものである。しかるにそこに二つの不健全性が随伴してゐた。第一は歐

米資本主義は十八九世紀にかけこの産業革命Ⅱ生産における機械使用による技術革命の結果発展したもので、この歴史は比較的古い。然るにわが国の資本主義はこれら欧米を先進国とし、その資本主義を後進国として受けついでもので、産業革命のごときも明治【⑦】三〇年代のほどに成立したに過ぎない。それほどにその歴史は極めて若い。それにも拘わらず先進国中の最大の資本主義国と肩を比べるに至った。従ってこれは急速な発達があった。発達の急速性これが一つ。

第二にはわが国は元来経済的資源の乏しい貧乏国である。従ってわが国総資本の経済量は僅少であるにかかわらず、その中大財閥資本の占める比重は、いちじるしく巨大である。嘗て今から十年程前に世界十二富豪を列挙した中にわが三井・三菱も数へられてゐた等も、これに関する具体的現象の一である。貧乏国日本に世界屈指の富豪があることそれ自身が経済不健全性を示す。かやうな事実にはわが資本主義が歪曲せられて発達したによるのでわが経済の跛行性をもつものである。すなはち多数の小資本者対少数の大資本の存在、といふ均衡を失った形態、跛行状態を呈してゐる、これが二つ。

かやうにわが資本主義には二つの不健全性をもつてゐる。而して不健全なものが、逞しく存続する為には、他の力「主体」の支持「または他の力と」結合によらなければならない。この場合、その力となったのは、国内的には官僚による政治力であり、国際的には軍閥による動力である。政治力結合は明治初年以來のことで資本主義育成の為に政府は初は「自発型」保護を加へたが資本主義の発達につれて政府は追つて強制的に保護せしめ、為に政治が財閥の為に動かされる迄に達した。この政治力との結合と因果乃至表裏関係となるのが武力との結合であつて、これも早くからあつて、わが資本主義乃至財閥が、日清・日露、第一次世界大戦等の戦争毎に飛躍的發展を遂げた事実にも照らしても明である。而してこの軍【⑧】閥との結合は、必ずしも我資本主義の不健全性にのみ

基づくのではなくして、一般に近代の国際関係において平常時でも潜在的な戦争状態を呈してゐるところに原因する必然の結果でもあつた。しかし我が国の場合には資本主義発達の後進性の故に、その発達を「阻」む国際的条件が一段と苛烈であつたところから、財閥と軍閥との結合が升々強化せられて具体化し、その結果この国際的条件排除の為に侵略主義が形成せられた。そこに軍閥にあつては軍国主義、資本(財閥)にあつては帝国主義的傾向を濃厚ならしむに至つた。しかし乍ら事ここに至つて資本主義は危険性を包蔵するに至つた。といふのは、この結合は軍閥側からいへば彼らが財閥の援護を得たこととなり、軍閥はこの援護によつて財閥の手先となり軍国主義的侵略行為、戦争へと誘導するからであつて満州事変から南京事変、それから大東亜戦への一聯の戦争はかくして展開したわけである。もとよりこの過程には軍閥の強引なる政治的面への進出、つまり五一五、二二六事件等を直接の契機とする政治家官僚の行退、軍人軍閥の進出から政治家の促進はさらに官僚議會のさらに軍閥への屈服雷同があつたことはいふまでもない。かくして軍閥を中心として官僚これに雷同し、財閥これに援護を与へたところに軍国主義はいよいよ強化せられてゆきその極は「国民をだまし―至尊をまでもあざむき奉り」、戦争を誘発したのであつた。「跛行性」はここにもあつたので「加之そつした軍国主義はつひに国を過ることとなり、ここに「×戦」敗戦といふ悲しみでも悲しみ切れない「惨めな」結果を招来したのである。然らば敗因はどこにあるのか。

【⑨】敗戦の原因は、「×表面的」「現象的」には、いろいろ取へられるのであらう。けれどもかかる現象的諸要因の奥底に潜在せる高次の原因であつて、随つて敗戦の根本的原因と見做されるのはさきにも述べたわが国資本主義経済不健全性としての発達の急速性と跛行性から導かれるわが国経済の脆弱性であるといひ得るであらう。さらにこれを厳密にいへば急速性の故に跛行性があり跛行性の故に脆弱性があるといへるであらう。而してかくのごとき経済における脆弱

性は経済の人間生活に占める地位よりしてやがてあらゆる物心両面の国民生活現象上の脆弱性となってくる。「加之」そのことはひいては近代戦の特質とするところの総力戦における脆弱性となって現れる。総力戦それは国民の物心両生活のすべてを挙げて戦争遂行の目的に向かはしむることによって齎らせる総合力の角遂である。その総合力は跛行性の故に各部面において、また全面において凹凸が甚だしく、為に戦力を著るしく低下せしむる。これを端的に示すために、科学(自然科学)・技術の面についてみる。(挿入線)過日の新聞(東朝)紙上にアメリカ軍がわが東京の防空の為の高射砲を評して、その性能自体は優秀ではあるが照準器が劣悪なるがために折角の高射砲もその能力を減ぜられ威力を発揮しないとある。これは一つの兵器における跛行性を物語るが、総合した場合にもそれが見られる。四年の月日「と巨額?の金を」を費して造り上げた総重備量六万二千噸といふ世界最大の戦艦「大和」、必要・可能なまた及ぶ限りのあらゆる科学の粋を費やし不沈艦を以つて誇った軍艦「大和」、この「大和」が沖繩戦への救援の最後切札として動くに当り、僚艦【⑩】の編成は極端に薄弱であり、航空部隊の援助が皆無であった為に、その猛威を発揮するに由なく、空しく、九州南方海域において、本年(昭和二〇年)四月二十九日、米航空隊によって撃沈せられた(東朝)。かうした例は潜水艦にも見られる。

かやうに世界一のものがある。しかしその世界一ものを活かすに必要な他の部面がそれに伴ってゐないために、その能力は著るしく散滅せられるのみならず、無益な犠牲を増大したのである。世界無比を誇ったわが潜水艦Ⅱ飛行機搭載艦・特殊潜航艇の搭載艦であるわが潜水艦はハワイの緒戦以来多少の起伏はあるがともかくも作戦は有利に導いてきた。しかるにそれが米艦からの電探(電波探知機)射撃を受けて以来、俄然劣勢を招いた。すなわちガナルカナル補給作戦、これに痛手を受けたわが潜水艦は、それを癒す暇もなく、危機迫るアツツ、キスカ急援の為に、十八年五月、太平洋を北上した。この時、わが潜水

艦の一隻は濃霧の中から突如砲射撃を受け船長皆戦死した。この砲撃は米巡洋艦からの電探射撃であったので爾来米電探は太平洋を席卷しはじめ、わが潜水艦にとって恐るべき時代は刻々と訪れた。十八年末のギルバートおよびマーシャル付近の大損害も、また電探装置照●あったので、かくて遅ればせ乍ら且つ幼稚なものながら電探装置を施すこととなったものの狭い艦内に場どるに艦員はとかくこれを忌避し、『訓練さえ出来ておれば電探何のその』といふ誤れる感情、科学戦への悲しむべき懷疑・科学なき戦闘の継続は、ついにかのサイパン周辺において一挙に多数の潜水艦を喪ふといふ悲劇と招くに至つたのである。因にこの海戦の後、海戦から率して帰投した一潜水艦兵の電探取付の急務を紛糾を期としてわが潜水艦もこの利用に成功し、やや動勢を盛り返したのであるが、その電探こそは、是よりまた十八年に「わが一潜水艦が」印度洋・喜望峯「ケープタウンをへて」大西洋に出てナイスドイツを訪れ優秀な独の電波兵器及び技師を獲得して、十二月英に侵攻したのを基礎に置くもので、ここにわが幼稚な電波兵器に一大革命を招来したのであった。

【⑪】以上の「事」例から推しても科学における跛行性が、如何に戦力を弱め、労多くして功少き悲劇に導きつつ、あつたかは略て了解せらるるであろう。しかしそれは、同質の場合の時のみ限られないので、異質のもの間における跛行性にあつても同じである。精神と物質即ち物と心との間に凹凸状態も同じく戦力を脆弱ならしめたのでそれはかの潜水艦への電探搭載りに対して、精神さへ充分あれば電探不用と拒絶したところに充分これを看取し得やう「原子爆弾対竹槍といふ現象の示すにもそれを求め得るのである。」これを一般的にいへば仮に物の方は近代科学化されてゐても、心の方がされてゐず、一時代前の封建制そのままであるといふ凹凸状態である。物の面が近代的自然科学すれば精神の面もそれに随伴して近代的精神になるのでなければ完全円滑なる戦力発揮が望まれないわけである。加之それが跛行状態になつたのである。

(貼紙)「精神は昔ながらの精神で凝り固まってるたのである。それは軍人のみではない。戦争開始当時の閣僚の一人(橋田■元文相)は自然科学者から大臣になった人の場合もこれである、彼は平常から『武士は恥かしめを受ければ死す』といってるたといふ。果してその彼が終戦後、「戦争後仙台にて」米軍司令部からの召喚を求めくるや自殺した。この言行の一致は陽明学を奉じる彼自身にとっては、正しい態度であつたであろう。けれどもそれは中世人・封建時代人としての正しさであつて、近代人としての正しさではない。✕(朱マーク)彼は現実の身は近代に住み乍ら、精神は過去に住み、封建時代に住んでゐたのであり、しかもその現実の身を封建的意識の犠牲にしたのである。況んや彼は「×文相」「大臣」といふ公人であり、且つ国粹的または国家主義的思想を慎し人である●●みれば、どこ迄も生きのび堂々と法廷に立つて、戦争の責任に関し至尊の関与し致はざることを死を以つて争ふべきである。自殺するならばその時にも決しておそくはないのである。そうすることが彼の思想から招いて本悦とするところでないならぬ。然るにこれをなす只一身を禊とすることのみ(×走つた)「及ばず先走つ」て自殺した。■戦争責任●●自殺すれば、「してしきりで、いよいよ戦争責任の開戦に関する戦犯如何にも●●になり」「誰が至尊に責任のおはさざることを弁明するのか。「無責任も甚だしいといはざるを得ず也」法廷に立つことは近代的法治国家に住む国民として豪も恥ではない。とかく日本人の意識のうちには裁判所や警察署に出頭することを恥とする傾がある。しかしそれは日本人がまだ完全に近代的法治国民になり切れない証拠ともいへる。彼もまたこの面に関する限り近代人として完成してはゐなかつたのである。(付箋)✕(朱マーク)供奉する過去の思想に忠実ならんとするならば、その思想を近代化させなければならぬ。そうでない限り思想と行動にギャップを生じ、行動が正当化しない。彼はそれを怠つたわけである」この傾向は外にもあるが、それは跛行状態(貼紙止)」

に関して、米記者が「近代的兵器である大砲と、中世のサムライ意識を持った人間が同居してゐる日本」とのべてをり、そしてこれを『改造』せなければならぬといつてゐる。

而してこれは米人の指図をまつまでもなく、日本軍において一般的にいへば日本においてとうの昔に取上ぐべき問題であつた。脆弱性を強靱性とする為には、跛行性にメスを入れ均衡性を得なければならぬからである。然るに自発的にこのことに及ばないのみならず、却つて跛行性を愈々強化し凹凸は益々甚だしくするの方向を辿つて行つた。すなわち高きものは愈々高く、低きものはいよいよ低からしめていつたのである。資本主義経済が独占状態に發展せる反面においてその基礎としての社会的思想としての自由主義は極度に圧迫せられ縮少していった。

〔12〕この場合の独占的資本主義への發展は、反射的に社会から自由主義を奪つてゆく過程であるが、それをさらに強権的に奪い取つていつたのは、軍事をはじめ、政治経済・文化などが、澎湃たるファシズム(ナチズムヲ含めて)独裁政治権力の強化をはかる社会思想たるファシズムに包まれたことである。もとよりその過程には、これを阻止せんとする外力としての自由主義との間に痛ましき正面衝突の数々があつた。それは昭和三年頃に始り十年頃から頓にはげしくなつたので、その結果として、近代日本の社会思想に大きな推進力となり、指導中枢であつた自由主義的思想家乃至評論家が治安維持法以下言論・結社・集会等に関する取締法令を通して抑圧・弾圧・圧迫せられ或は教壇から追放され、或は獄舎に繋がれ、或は著書が発禁されて、一種の恐怖^{テロ}時代を現出し思想界は●●と荒波へ圧を加えていた。かくてわが国社会のあらゆる面からまづ近代経済学の一学説たる唯物論のマルクス理論が消へ、天皇機関説が消へ、民主主義が消え、最後に自由主義の残火も消えて学者思想家評論家は地下への抱装へ、変節乃至は無為へと急速に解体していったのである。そうしてこれに

代って「折しも」風雲したのがかのファシズムである。然らばいふところのファシズムが、果たしていつ頃からわが国に浸潤するやうになったものであらうか。これを軍事的に見れば昭和六年の満州事変から支那事変への途(満州皇姑屯における張作霖爆死の件に発し三月事件・満州事変・十月事件から支那事変)を辿ったものといつてよからるべく、政治的にいへば(行頭✓マーク) 年の防共協定、新体制運動、三国同盟の順を追って進み、また経済的には、年内閣調査局の設置に始まり総動員法に拍車せられ、自由主義経済を拘束した統制経済運動の強化を踏切り台として飛躍した観があり、さらにこれらに附随する各般の文化運動、すなはち「×過去を回顧する」極端な自由賛美の国粹主義・同じく極端な国家権力擁護・民権抑止の国家主義乃至個人よりも全体を至上視する全体主義等軍国主義に便乗し結合してそうしたものを内面的な指導力・支配力とし表面的には報国等の美名によって擬態せられた文化運動の跳梁を加へて、ここに膨脹たるファシ【13】ズム風潮を形成するに至り、つひに悠久三千歳、かつて敗戦の汚れを知らぬ日本をば、悲痛なる大東亜戦争の渦中に引摺り込んでいったのである。

かやうにして一切のものが戦争の渦中に巻込まれていった。それは従来の跛行性が是正せられざるのみならず却って強化せられて巻込まれたわけである。この故にそうして強度の跛行性は、戦(貼紙)「争遂行上の障碍・溢路となつて現はれた。それは戦争遂行の可能性の目標が跛行性における高き面のみに求め置かれ、低き面は顧みられなかつたからで、戦争が永引き総力戦の形態がいよいよ強化せられるに及んでは必然的に不備不足となつて暴露するに至つた。とにかくしてこれは、その打開策にしての諸法令の代償といふ形となつて現はれた。しかし最早やいはば手遅れあつて、朝令改暮・屋上屋を架するの複雑な諸法令は徒らに」国民を駆使し、あらゆる面の能率を低下させ疲弊せしむるに過ぎなかつた。この状態で相表裏して物質生活は漸次に窮屈化の度を加へ国際力が盛

行するに日頃に戦況は敗色の一路を辿つていき、つひには本土さへも米軍の空襲にさらされ、都市といふ都市は殆んど破壊せざるはなしといふ状態下に置かれた。かくしてこの流に沿ふてこれを温床として敗戦思想は、漸く潜在的または無意識に構成せられていたので、それは国内においてのみならず、戦場においては却つて著るしいものがあつたらしく、比島において戦意を失つた多数兵に夥しき食料・兵器・弾薬をふり捨て争うて山中に逃げ込んだといはれる。わが将兵の不道徳行為もこれに深い関係をもつ。この敗戦思想と併行して和平運動も秘密裏にか進行してゐた。中野正剛を中心とする所謂重臣層の運動これで、若しこれが奏功してをれば、日本の悲惨の度は貼紙「著るしく緩和せられたであらう。ただ彼等としても当時(シンガポール陥落等)の戦局から推して確固自信を欠き、為に和平運動の押し切つて実和をはかるに至らず、国民の大部分も、正確な戦況を目かくされてゐたため目前の戦勝に幻惑し酔つて、たとい和平運動を知らされても、支持せなかつたであらう。そうした風潮を利用し」

【14】軍閥は強引に、敗戦をひた隠しにかくして一億総蹶起・本土決戦といふかけ声国民をごまかしつつ戦争を継続し、そのドン底に引こんでいった。(付箋)。「●●●ちに転進」とか『鉄桶の布陣』とか叫んでゴマカシだけ●●●ひしそれは国民の生活・幸福を無視し、軍だけが生き残るための作戦だった。沖繩は奪はれ、原子爆弾を見舞はれたことこれにソ連の攻撃もまたこれにやられた。(付箋)。「本土決戦を企図し、二百万を越ゆる大軍が、戦闘配置につき、軍不参加も●●●配置す。」とここに至るや東条内閣の「×後退」「崩壊以後」小磯内閣より鈴木内閣に至つて漸次盛り返して来たかの和平運動は万難を排してち、つひに米英ソ支四国によるポツダム宣言を受諾し無条件降伏することとなり、本年(二十年)八月十五日それに関する詔勅が下り終戦を預るに至つたのである。(貼紙)「この結果としては、台湾を失ひ、樺太を失ひ朝鮮を失つた上に沖繩・千島までも失はねばならず、国法的地位は一等国から四等国におとされる破目とな

「り、遂に明治維新以前の状態におしもどされることとなった。」これらの領土や地域は明治維新以来、われわれの父祖が、その手段・方法において、正しかったか否か、善であったか否かはこれを別として、兎にも角にも、粒々辛苦、寸を積んで尺と為すというやうに、ひたむきな努力によって、やっと築き上げたもので、この領土の「塵の」如きも、欧米諸国の(数行空白あり・剝離貼紙)「(前略重複)築き上げられたものである。それが一朝にして水泡に帰しすべてを取り上げ明治維新以前の状態にひきもどされたわけである。このことは、極く皮相的に見れば明治維新以降現代に至る何十年の歴史は、空白であり夢であるかにかさへ思はれ、したがって、歴史的発展といふ概念はくつがへされ、この間の歴(貼紙止)」史の研究は徒勞であり一種の馬鹿らしさをさへ感ぜじむるものがある。かやうに領土が狭められるのみではない。これまでの領土や外国に發展してゐた邦人の大部分は、故国に押しもどされることとなり、それが為に縮少されたこの国土に七千余万人といふ大人口が押し込まれ生きねばならなくなつた。それは旧い社会に盛り切れないものを盛り込まねばならないことを意味する。「かくてこの矛盾の解決のためには、必然的に、政治経済文化等の全面的に亘る敗退」が要求せられる。その要求は現実的には、自律的な形においてではなく、他律的な形において果たされつつある。理由は敗戦の結果として、国際連合国とくにアメリカの【15】管理下におかれ、その半植民地の地位に置かれてゐるからである。その管理は相当長期になるものと覚悟せなければならぬ。この長期になる管理によって指令せられし支配の原理は民主主義であれ、自由主義であれといふことである。まとめいへば近代国家の実現といふことである。

この実現は、歴史的には一旦見失つたものの取もどしであるともいへやう。わが日本が近代国家たらんと企てたのは明治維新以来のことであり、その要素としての民主主義・自由主義は初は仏国流のそれら、後にはキリスト教による

米国流のそれらが移(貼紙)「植せられ發展したのである。だが、その發展は皮相的になり跛行的であつたので、皮相的であるが故に国家の近代化は擬態的近代化たるに止まり、跛行的であるが故に民主主義は借場の形において、自由主義は■歪曲せられた形において存続するに過ぎない。しかもそれらは満州事変より大東亜戦に至る過程において極端に」強化せられた。それが今や直接にはアメリカの指令によって解放せられ、實質的に近代化、したかつて全面的なる民主主義・自由主義の再建が要求せられた。而してその全面的なるものへの変化は現実的には、跛行性の是正、凹凸状態の解消といふ形の下に現「×はれ」前してゐる。大財閥(挿入朱線)の解体、アンチトラストは、経済的跛行性における、自由主義行き過ぎの是正であり解消である。政治部局・思想警察機関の特高警察治安維持法等の廃止による官憲主義の否定は、未発達の民主主義・自由主義の向上であり、育成である。(上部貼紙)「憲法改定」×華族廃止・知事公選・女子参政権・労働組合法・財産税及び財産増加税(戦時利得税)等が特に実現を予約せられてゐるのも、同じく発達の遅れた民主主義・自由主義の向上乃至育成である。これら行き過ぎと未発達とが並在してゐることは、わが国社会機構の欠点であつて、この状態にメスを入れることは社会主義の実現であつて今後の社会の基礎を堅固なさしむるものといへやう。而してその場合「一般的にいて、この未発達の面に、行き過ぎの面に比して、その占める分野かはるかに席い。ここにわが国の全般的なる民主主義・自由主義の働かざるによるわけである。その引上げによって陸」【16】「海空軍の全面的覆滅を契機としてその後にはひかえるところの軍国」主義による好戦主義もろともに国民から扨拭せんとするのである。何故となれば非民主と非自由主義のあるところでは、合理的に物事が運ばれずして眞現への道が塞がれ勝ちであり而もそれが塞がれると輿論は歪められて闘争的情熱を起す危険な道に走らされる傾向を帯びるが、その闘争的情熱が温床となつて好戦主義が生れやがてそれは軍国主義へと成長する

からである。

然らばいふところの非民主主義・非自由主義とは何か。封建主義これであつて、そこには専制と束縛とがある。こうした封建主義による社会、それは本格的には中世の鎌倉時代から始まり近世の江戸時代まで存続した。而して明治維新は一つはこれを否定して、民主主義・自由主義に到る近代的国家を実現しここに資本主義社会が出現した。

〔貼紙〕しかもその近代化によって、また資本主義社会化によって、近代化・資本主義社会化の遅れた清国を制し帝政露シアを制したのではあつた。けれども先進国としての米英等の近代国家・資本主義社会に対しては齒が立たず惨敗に終わった。その基づくところは明治維新は窮極においては政治革命であつて、社会革命でなかつた上に、外部的には欧米先進国との關係が歴史的にも地理的にも疎遠であつて内部的には資源に乏しい貧乏国であること等によって、近代国家化・資本主義社会の完成化が阻止せられ、反対に旧封建主義がいつまでも牢固として抜きがたい社会的存〔17〕在として続いたところにある。封建主義の根強さとは〔裏面挿入線〕それは日本を占領した米国が、日本人に自由を強制するというやうなやり方でなくては、大した成果を期待出来ないことを覚つたといふに徴しても強硬なるものであるが、〔別紙〕しかもそれを現在の日本人自身にも納得の生き兼ねるやうな非合理的な神がかりに近いところまで發展させてこれを外地に宣伝し思想統一の道具に供せんとした。それを中核とする中世紀的哲学そのままが日本精神若くは日本思想の本質として強調せられたに照らしても明らかであらう。し、〔裏面挿入線〕旧武士道的理念を無批判にしかも低俗に織込んだ漫談物が圧倒的な国民の文芸趣味を構成してゐたことによつてもわかるであらう、さらに「また封建制が如何に近代化・資本主義化の完成を阻止したかは、その基礎である資本主義経済において、自由競争による営利性が、周囲乃至地盤が封建的であればあるほど無競争状態の中に立つこととなる關係を有し

て容易に急速に孤立的に過大に肥つていったが、こうした發展は結局において歪曲せられた發達であつて、円滑なる資本主義経済の發展ではあり得ないに徴しても分かるであらう。

かやうに封建主義は強靱に存続して社会の性格を規定した。かかる封建制の存続は、これを世界史的にいへば、日本国家の社会的後進性を意味するものであり、その故に今やこの封建制の完全なる払拭が要求せられたわけであつて、この要求実現によつてわが国社会は、却つて世界的水準に到〔18〕達し得るのである。アメリカ軍人として日本攻撃に参加した日本人が、自分の祖国に対して弓引くのではなく、日本の封建性に対して敵対するのであると心情を吐露してゐるのも、要するに封建性といふ過去の国体をたち切り民主主義・自由主義を完成して眞実の近世国家たらしめんと希求する祖国愛の發露に外ならないであらう。

ただしこの場合に、資本主義社会における民主主義・自由主義に敵対的なものではなく、中世紀的なるものに向向しての民主主義・自由主義であるが故に、資本主義社会に実現し得る民主主義・自由主義は、一般的な社会自体の限度を持つ民主主義・自由主義を最大限度に拡充し確立することが出来ない。従つてわが国の今後に実現せらるる民主主義・自由主義も、またその範囲内のもの、具体的には少くもアメリカのその如くであつてそれ以上には出てないものと見るべきである。大財閥解体といふアメリカの指令のごときも、それは、自由競争を阻害する独占の排除、価格形成ならびに資本の独占排除を企図することどまり、資本主義経済そのものの排除を意味するものではない。アメリカは資本主義国家である。のみならずそこにはしかしその弊害を認めてアンチトラスト法さへ実現せられてゐる。わが大財閥に対するアンチトラストの適用は、それによつて戦争誘発の危険性の除去を当面の目的とするものであるに止まり、資本主義を枯渇せしめ、それ以上に出でるこ〔19〕と、共產主義形態を究局と

する社会主義経済、したがってそれに基づく共産社会国家の実現を要求するものではない。白色デモクラシーであって赤色デモクラシーではない。「ここに自ら一度の●度●見出●される。」もとよりさきにもべた如く、今度の我国情は共産主義の発展すべき温床を充分にはらんでをり、また共産主義は、社会の進歩的な推進力となることは争はれないであらう。「具体的にいへば」ソ連的なものが社会政策的に多分に取入れられ織込まれるであらう。が国体の「根本的」変革にまでは至らないであらう。もとより民主主義は「原則として」君主主義に対立するものである。両主義は相容れないものである。けれども原則は環境に応じて具体的に表現せられる。環境これはわが国史より導かれる日本の国家としての性格であって、皇室が国史を通じての一貫せる存在であるといふところにもそれだけの必然性があり「しかも天皇は常に專制的なかつたこと」、これが国家の性格を規定し、やがて民主主義発現にも作用するものと信ずる。

かくてこの出現に順うてわが国体は新装せられ〔20〕その「×国体とする国」とその日本は「枠内において明治維新以後の過程において充分に解決し盡されるに至らなかつた残滓が、今後の過程のうちに解消せらるべき約束におかれてゐるといへやう。けれどもそこに存続する日本は、国際的には最早や、在りし日のやうな独立国ではない。一等国から四等国へ転落すると伝へらるる日本である。しかもその日本に少くも「×米軍」連合国司令官管理下にある間は、実質的には半独立国であり、極端にいへば米の植民地に近い性格をもつこととなるので、その点においてヒリッピンの地位に似てゐるともいへやう。外交・外国貿易はいふまでもなく、国内問題までも制限乃至干渉を一方的に甘受せざるを得ないからである。(符箋)「今日の日本は独立国の意思決定権ヲモタナイ国である。万事連合国の方針に依存せねばならない存在である。政治・経済・文化の再設計をなす上に、自主的意欲を通ずることが出来ない立場にある。」それにも拘はず形式的にはどこまでも独立国であるが故に、国内問題をはじめと

して外交・外国貿易に関して、かのアメリカの制限・干渉の枠内において創意による自主的に処理することを要望される。制限干渉付か直接保護がない境遇である。思へば險しく困難な経路ではある。

然らば独立国家としての日本は、今後において、どんな国家体制のもとに存続すべきであらうか。武装皆兵の永世中立国として民主主義国スイスの如き行き方が一つである。ここでは徹底した民主主義による自治制が実現せられており、また人民に対する議会政治參與権が与へられてゐるのみならず、議会とは別に人民による直接立法動議権(全有権者の五万人〔120〕の署名があれば改革案を政府に提出し、政府は即刻国民投票に訴へて採決する)が憲法により認められてゐる。徹底した地方自治制の実現もさることながら、直接動議権のごときは、とかく国民から遊離し勝ちな議会政治の弊害除去の方法として、高く評価せらるべきであらう。ただしこの国は、欧州の中央に位しながら、欧州の歴史に何らの指導的役割を果たさなかつたこと、〔21〕及び国土がわが九州よりも狭く人口も120の四百万余りであるといふ小国であること、この二点においてわが国情乃至環境と異としてゐる。このスイスに比し、より我国に近い環境をもつのは北欧の立憲君主国スエーデンであつてその行き方も一つの暗示を与へる。ただこの国の国土は日本の一・五倍(四四八方キロ)で近似してゐるしかし人口比は110の六百五十万人に過ぎない点では違つてゐる。しかしこの国は武装らしい武装をもつてゐない点において、今や全面的な武装解除を見た日本と相似てゐる。しかもその動機において、スエーデンでは十八世紀の初めチャールス十二世といふ常勝將軍の名をほしいままにした王が現はれ、一時はしきりに近隣を攻略して領土を横とつたのであつたが、ポルタヴァの一戦において露のペートル大帝に破られて以来、また振わず、徒らに北方の流昇王の名のみ為て、つひに攻略した領土を悉く吐き出し、現在の版図だけに限られるに至つたのであるが、そのことは明治以後とられた大革命制において一時的に領土を大陸南

洋方面に伸ばしたものの、忽にして米軍に敗られ悉くそれらを失って明治初年の版図にもどされたわが日本の場合と、時差はあるが相似てゐる。そのスエーデンは立憲君主国ではあるが、民主主義・自由主義が俯瞰的に発達し、その結果は人民生活の幸福となつて現はれてゐるので、個人の富力は米国の場合以上である。と同時に文化度も著しく高いことは北欧文化とかノーベル賞とかの存在によつて推すことが出来る。ただししかしこれにはさききのべた如く、面積(国土)に比して人口が少く、且つ豊富なる鉱物資源にめぐまれ、それをそのまま輸出するのみならずその資源に基礎を置く精密機械工業が高度に発達して優秀な製品を輸出するといふ点において、我日本と異なつてゐる。その精密機械の製造輸出といふ点はスイスの場合も同様である。

〔22〕国情全般につき、スイス・スエーデンの場合と、日本の場合とを極く大まかに概括して調べてみると、彼は洗練されてゐるが単純である、我は複雑であるが粗放であるといふ相違がある。若し今後の我国情を、スイス、スエーデンの域にまで上げんとするならば、この複雑なるものを洗練せなければならぬ。複雑なるものの洗練は、単純なるものの洗練に比べて粗であるべきはいふまでもない。スイス・スエーデンが現状へ到達するまでには幾多の困難なる歴史的過程をくぐつたのであるがわが国の前途にはさらに一段と困難なる過程が約束せられてゐるわけである。思へば險しく苦しい道である。(以下つづく)

(参考)〔44〕止 これまで多少のウソ・イツワリはあつたにもせよ、ともかくも幼いころから最も優かなる国体をもつ日本、最も恵まれた自然をもつ日本、最も美しい人情をもつ日本として、教へられもすれば、信じ切つても来たこの日本、われわれにとつて、かけがえのない祖国「この」日本を、夢としてではなく、現(ウツ)として、世界に「大きく」浮び上がらせねばならない。希ふて止まない。「×これを乏しい饑とする。」とくに、若き世代の人々に対して、望ん

で止まない。」(半紙半分くらい 以下余白)

紙背文書 収録分一覽

①・② 西岡虎之助宛 日本女子大学中村政雄書簡

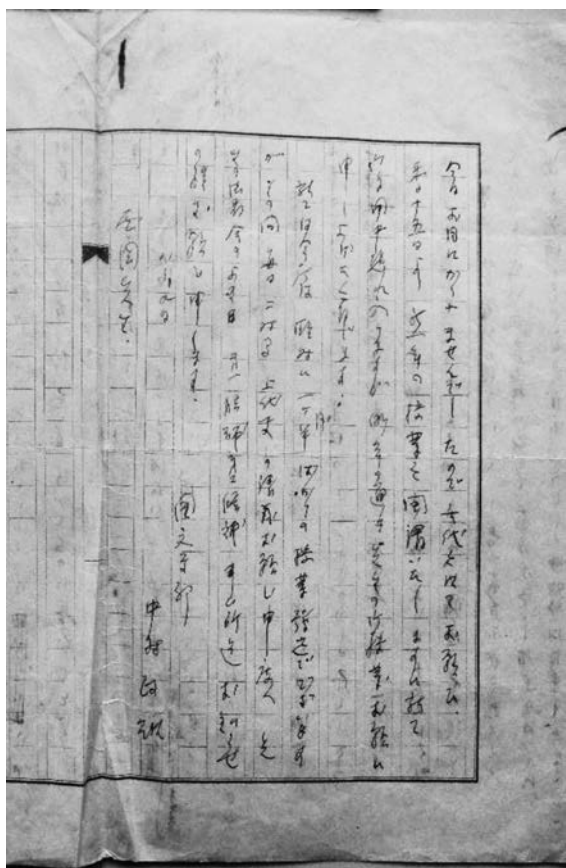
今日お目にかかれませんでしたので舌代を以てお願ひ。来る十五日より新一年の授業を開講いたします就て御多用中恐れ入りますが例年の通り、先生の御授業お願ひ申し上げたく存じます。

就ては今度は臨時に一カ月半ばかりの授業豫定でございますがその間毎日二時間上代史の講義お願ひ申し度く 先生の御都合の良き日 第一候補第二候補事ム所迄お知らせの程をお願ひ申します。

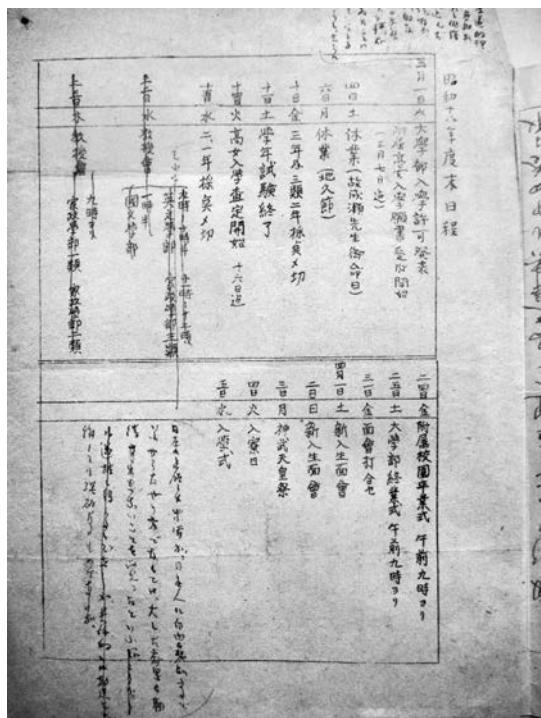
(1925年推定)八月九日

国文学部 中村政雄

西岡先生



- ③・④ 印刷物・春季二科美術展覧会出品目録 1942年4月
- ⑤・⑥ 印刷物・中学校理科の問題プリント
- ⑦・⑧ 印刷物・三菱銀行経済月報 1941年1月
- ⑨・⑩ 印刷物・財界主要統計(三菱銀行調査課発行)1940年2月
- ⑪・⑫・⑬ 西岡虎之助宛 富山房高田要書簡 原稿依頼 1943年1月16日
- 富山房国史辞典四卷の監修依頼状(全2葉)
- 原稿用紙「富山房国史辞典編集部」
- ⑬・⑭ 印刷物・経済月報カ(二井銀行調査課発行)1941年2月
- ⑮・⑯ 印刷物・経済月報カ 1941年2月
- ⑰ 印刷物・日本女子大学昭和十八年度学期末日程表 1943年3月



⑰・⑱ 印刷物・東京帝国大学経済学部昭和19年10月入学者名簿

経済学科学生207名・商学科学生106名 全313名

参考⑳・㉑・㉒ 東京帝国大学経済学部・西岡先生「日本経済史」レポート

1944年5月15日 小島秀雄提出

